

発表レジュメ「密教図像と宗教実践にみる人間存在の諸相」

佐久間留理子

(公財) 中村元東方研究所・専任研究員

ネパール・カトマンズ盆地では、インドから伝えられた大乘仏教や密教が、インド的な要素を濃厚に残しながら、現在もネワール族によって信仰されている。このような伝統的な仏教はネワール仏教と呼ばれ、インド仏教滅亡後も南アジアにおいて存続する仏教として注目される。

仏教では一般的に、悟りを目指し修行する宗教的エリート（出家・僧侶）と、世俗的な生活をおくり出家を支える一般信者（在家）とが相互依存的に共存してきた。他方、現在のネワール仏教においては、両者は各々世襲化され、出家カーストと在家カーストという形態として共存している。前者は、儀礼を専門的に行うヴァジュラーチャーリヤと呼ばれる僧侶と、仏像や絵画を製作するシャキヤと呼ばれる僧侶とに大別される。出家カーストの僧侶は、妻帯するとともに一般信者からの世間的レベルの要望にも応える。例えば、ヴァジュラーチャーリヤは、観想によって仏との一体化を目指す秘儀的 (esoteric) な密教儀礼を行うが、その儀礼には、しばしばご利益を求める一般信者（施主）が参加する公開的 (exoteric) な性格が付加される。

このように宗教的エリートと一般信者とが相互依存的に関わる宗教実践の一つに「アシュタミー・ヴラタ」、もしくは、「ウポーシャダ・ヴラタ」と呼ばれる儀礼がある。これは、断食行をとまなう「ヴラタ」儀礼の一種であるが、現在では特に不空罽索観自在マンダラ等を礼拝、供養するものとして知られている。この儀礼は、A 導師の部と B 施主の部に大別される。A では、不空罽索観自在の三三昧や不空罽索観自在マンダラの供養法等が実践されるが、前者では三種のマンダラが、また、後者では一種のマンダラが登場する。一方、B では、三宝マンダラの礼拝や不空罽索観自在マンダラの供養法等が実践されるが、後者の不空罽索観自在マンダラは、A の不空罽索観自在マンダラの供養法に登場するものと同様である。つまり、現行の儀礼では、四種の不空罽索観自在マンダラが登場し、儀礼全体において重要な役割を果たしている。

「アシュタミー・ヴラタ」の儀礼については、既に J. ロックがその概略を公表するが (1980, 1987)、上述の四種の不空罽索観自在マンダラの象徴性については十分に考察していない。また、それらのマンダラが上述の秘儀的、公開的という視点からみて、各々どのような機能を有するのかという点についても十分に解明していない。本発表では、現行の儀礼の事例に基づき、これらの問題について検討する。それによって、宗教的エリート（特にヴァジュラーチャーリヤ）と一般信者という人間存在の二元性が、不空罽索観自在マンダラの象徴性や機能にどのように反映されているのかを指摘したい。

キーワード マンダラ、儀礼、不空罽索観自在、ネパール